令和3年度第１回清瀬市総合教育会議

令和3年度第１回清瀬市総合教育会議が令和３年7月9日午後2時に招集された。出席委員、議事の大要は次のとおり。

１　日　　時　　令和３年7月9日（金）午後2時から

２　場　　所　　清瀬市役所本庁舎　庁議室

３　出　席　者　　渋 谷　金太郎（清瀬市長）
坂 田　　篤　　（清瀬市教育委員会教育長）
宮 川　保 之　（教育長職務代理者）
粕 谷　　衛　　（教育委員）
兵 頭　扶美枝（教育委員）
土 屋　佳 子　（教育委員）

４　事　務　局　　今 村　広 司（企画部長）
粕 谷　靖 宏（教育部長）
戸 野　慎 吾（企画課長）
中 山　兼 一（教育総務課長）

５　オブザーバー　　学校法人日本社会事業大学付属子ども学園園長
山 本　智

６　書　　記　　立 川　恭子（教育総務課）

議事日程

1. 開会

2. 協議事項

(1)「家庭の教育力」

(2) その他

３.閉会

午後２時　　開会

開会

(戸野企画課長)
　それでは、これより、令和3年度第1回清瀬市総合教育会議を開催いたします。
　それでは、渋谷市長、よろしくお願いいたします。

(渋谷市長)
　皆さま、お集まりいただきありがとうございます。

(一同)
　こんにちは。

(渋谷市長)
　本日の協議事項は、家庭の教育力。コロナの問題で下がっているところ。家庭が、しっかり支え合う家庭である。家庭の教育力。一回皆さんで検証し合いましょう。
　では、そういったような、皆さんから忌憚（きたん）のないご意見を頂戴して、議論をしながら、この家庭の教育力をしっかり確かめていきたいと思います。
　ここからは、教育長に進行をお願いします。

(坂田教育長)
　はい。それでは、教育長でございます。よろしくお願いいたします。
　今日は、子ども学園の山本園長にも、オブザーバーとしてご出席いただきました。後ほど、また自己紹介を含めて、ご意見を頂くことができると思っております。
　今、市長からお話があったように、本日のテーマは、家庭の教育力をいかに向上させていくかというところです。非常に難しい問題。行政がなかなか関わりにくい問題なんですけれども、何かしらの手はあるはずでございます。そこをちょっと探っていくことができれば、それで何らかの結論を1つでも出せればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（坂田教育長）
　家庭が育ちの原点であることは、教育基本法の第10条に示されておりますけれども、ここに示されるまでもないことでございます。心身の調和が取れた発達を図るというのは、これは家庭の責務なんですけれども、私は、親と子というのは無条件の愛でつながっていると理解しています。
　これは、いかなる生き物であっても母の愛は偉大であるということで、YouTubeからこの動画を拾ってきましたんで、見ていただければと思います。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　インドで、大雨で家屋が崩れて、そこに野良犬がいるという通報を受けて、政府の人が来たというストーリーだと思います。
　もう少し見ていたい感動的な動画なんですけれども、われわれは、この動物からも学ばなければいけないことがあるんではないかと私は感じました。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　そういう中で、やはり子どもは、ありとあらゆる感覚を駆使して親とスキンシップを求めている。こういうような実験が、過去に行われておりました。これも、ちょっと動画を引いてきましたんで、ご覧いただければと。ハーロウの代理母実験というものでございます。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　これは、ハーロウというアメリカの心理学者なんですけれども、この方が、ワイヤで作ったお母さんサルの模型と、毛でできたお母さんサルの模型のですね。こちらのワイヤのほうは、お乳が出るようになっている。毛皮のほうはお乳が出ません。ハーロウは、こちらの、針金のほうの母親に子ザルは食い付くだろうと予想を立てていました。予想通り最初は針金のほうへいきましたが、その後毛の模型から離れようとしませんでした。
　われわれ動物は、赤ん坊は、どんな動物であっても、その親との肌の触れ合いを、やはり大切だということの実験だろうと、私は理解しました。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　次の動画をご覧ください。これは、エドワードの無表情実験という、これも心理学者が行った実験です。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　という実験です。これは、最後に「OK」と言ってくれなければ、本当につらい実験なんですけれども、全ての感覚をフル活用して、子どもは母親との関わりを、親との関わりを望んでいるということが、私は一部でも垣間見えるんではないかと思います。
　ただ、今はそれがなかなかできないような時代になってきてしまっている。地縁・血縁の希薄化、核家族化、氾濫する子育て情報、女性の社会進出、育児を肩代わりする保育園。自己の生活を最優先する親の意識等々で、子育てに対する悩みや不安、孤立感というものを抱えてい

る親が、非常に多くなってきているといわれています。
　これは内閣府が調べたものですけれども、共働き家庭が非常に増加しているというようなデータでございます。子どもにかかる時間が、相対的に減っているということです。
　また、子育てに精神的に負担を抱えているか、もしくは孤立感を感じているか、余裕を持って子どもと向き合っていると感じているか。これは2019年の、日本財団が調べたデータですけれども、やはり「精神的な負担をとても感じている」という方が12.9%にもなる。「孤立感を抱えている」という方は、「少し感じる」を含めると40%近い。または「余裕がない」というところも、ここから見て取れるんではないかと思います。
　子どもを育てるということは、本当に時間と根気のいる仕事だと思います。精神的・時間的な余裕、ゆとりがないと、子どもというのは、なかなかうまく育っていかないもんではないかと、私は理解しています。そこが、ちょっと非常に厳しい状況に、わが国はなっているということを、この3つのデータからも分かるのではないでしょうか。
　もう一つはこれです。子育ての悩みを相談できる人がいるかどうか。若干古いデータ、2010年のものなんですけれども、首都圏のほうが実は相談相手が多いという、これは私にとって意外な結果でした。やはり、首都圏は相談できるというような機関、公的機関が多いんではないかと思います。地方都市は、やはり24.1%の人は「1人もいない」と答えています。清瀬市のデータはございません。
　そういう中で、母親の気持ち、親の気持ちをもう少し深く分析してみると、この4つの表現に分かれるんではないかと私は思って、分析をしています。1つ目はネグレクト。疲れているのに泣いてばかりで憎しみを感じる。もう一つが人格否定。この子の悪いところを直すのは親の責任であるという、ゆがんだ責任感です。
　右側にいきますと、過保護。愛するわが子に苦労や失敗をさせたくないという、親の、非常にこれも行き過ぎた思いです。また、過干渉。私の理想とする子どもになってほしいから、「ああせい、こうせい」と言う。
　これは、資料として落とし込もうと思ったんですけれども、この過干渉で、さまざまな犯罪が起きていることも事実でございます。例えば、秋葉原の大量殺人事件がありました。加藤智大という死刑囚が犯行に及んだんですけれども、彼は、非常に過干渉の家庭に育ったといわれています。私は、彼の手記を、出版された本も読みました。見るテレビは、「ドラえもん」を含めて2つしかないとか。「日本昔ばなし」ですか。作文の添削を目の前でやらされるとか、非常に厳しい家庭に育った少年期だったようです。
　左側のところの虐待、もしくは無関心というようなところで、1つ、これもYouTubeから動画を引っ張ってきました。虐待を行った母親のインタビューです。これは再生できない？ごめんなさい。再生できないようですね。再生できないですか。ごめんなさい。
　実は、今虐待を行っていた親が、子どもと引き離されて、やはり子どもの養育能力が低いと判断されて、母子分離をやらされたというようなところです。非常に深く反省をしているというような動画でした。それでも時を巻き戻すことはできませんので、子どもにもすごく強い影響が表れてきてしまっているというような動画が掲載されていました。
　これは、長崎市の医師会が出したものなんです。すみません。ちょっと調子が悪いようです。
　これは、スマホやゲーム依存というところで、母親がスマホの画面をずっと見ていると、子どもにどういう影響が出てくるのかというところを、このナカタニというドクターが解説をしている動画です。これは、愛着に障害が出てきます。間違いなく出てくるという結論でした。
　もう一つが、これは、先ほどの図で言ったら右側のところの、過保護・過干渉のところです。これは、なぜこんな宮沢賢治の詩を挙げたかといいますと、これをパロディとした、いわゆる模した作者不詳の詩が見つかりました。非常に何か考えさせられるものでした。ちょっと読ん

でみます。
　雨にも当てず、風にも当てず、雪にも夏の暑さにも当てず、ぶよぶよの体にたくさん着込み、意欲もなく、体力もなく、いつもブツブツ、不満を言っている。毎日塾に追われ、テレビに吸い付いて遊ばず、朝からあくびをして、集会があれば貧血を起こし、あらゆる事を自分のためだけに考えて顧みず。作業はぐずぐず、注意散漫、すぐに飽き、そしてすぐ忘れ、立派な家の自分の部屋に閉じこもっていて、東に病人あれば医者が悪いと言い、西に疲れた母あれば養老院に行けと言い、南に死にそうな人あらば寿命だといい、北にけんかや訴訟があれば、眺めて関わらず。日照りのときは冷房をつけ、寒さの朝は暖房をたき、みんなに勉強、勉強といわれ、叱られもせず、怖いものも知らず、こんな現代っ子に誰がした。
　非常に厳しい、これをパロディーの詩です。宮沢賢治が怒るかもしれませんけれども、私どもは、これは考えなければいけない。あまりにも子どもにとって快適な環境を与え過ぎるということは、果たしていいのかどうかというところは、直接子どもに関わる者は考えなければいけない問題であろう、と私は思っています。
　最後です。もうこれで終わります。清瀬市における家庭支援について、まとめさせていただきました。これが全てではございませんが、幾つかピックアップをしたので、ぜひ皆さん方に理解しておいていただければと思います。
　清瀬市では、14校連絡会というPTA会長の会があるんですけれども、そこで、皆さんで議論をしていただいて、「家庭の心得10か条」というものを作りました。その「家庭の心得10か条」は、「わが家では、『おはよう』、『ただいま』、『いただきます』のあいさつと『ありがとう』の感謝の言葉を欠かしません」とか、「わが家では、命・物を大切にします」とかいうような10のやりたいこと、心得が書かれているんですけれども、「この1つでもいいからやってください」というようなメッセージを発信しています。
　また、2行目ですけれども、清瀬市『家庭学習の手引き』ということで、近々公開の予定になっております。
　また、これは土屋先生、山本先生の最もご専門のところなんですが、スクール・ソーシャル・ワーカーによる家庭支援が、本市では非常に充実していると自負しているところでございます。さまざまな関係機関と、家庭と、もしくは本人、もしくは保護者等々をつないで、問題行動の背景となるものに対して働き掛けを行うことで、環境調整を行うというような役割でございます。
　本市では、武藤、伊藤の2名が、このワーカーとして、今活躍をし続けています。
これから先、このソーシャルワークという仕事が、もっと見直されていかなければならない時代。家庭を支援していく機能として、より一層充実が図られなければならない機能であろうと考えています。
　特に、やはり経済的に豊かではない地域については、臨床心理士ももちろん必要なんですけれども、ワーカーという方々のお力が、どうしても求められてくることになるんではないかと思います。
　当然、学校では保護者会・保護者面談を行って、保護者に対する支援を行っています。また、常々市長にもお話を申し上げているような学校支援本部が、つながりを再生していくということで、お互いにお互いを支え合っていこうというような風土をつくり上げていく中心的な機能になっています。
　また、右側ですけれども、教育委員による保護者との懇談会というものを本市ではやっております。それぞれの得意の分野が、われわれ5名の教育委員にございますので、保護者会に呼んでいただいて、小さい雰囲気でもいいから、一緒に話をさせてもらえないかということで、オーダーを受けているところです。去年、今年と、コロナ禍の関係でちょっと実施ができていま

せんが、土屋委員には、何回か足を運んでいただいたところでございます。
　この、これは言うまでもないことです。未来の世を育てる「赤ちゃんのチカラプロジェクト」。また、市長部局やNPOが行う子育て支援事業。教育相談センターや、子ども家庭支援施設などでのカウンセリング。学校医を学校のかかりつけ医にというプロジェクト。そして、もちろん、これは山本先生の子ども学園も、この中に入ってくるものであろうと考えております。
　もう見飽きたかもしれませんが、ぜひ、この……。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　これは、赤ちゃんの力プロジェクトの、新しいバージョンのVTRです。なぜ、これが家庭支援に当たるかと言う方がいらっしゃいますけれども、私は十分な家庭支援だと思っています。中学生による、子どもの、親としての疑似体験です。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　これは、未来を支えていく子どもたちにとって、重要な家庭の一員としての自覚を高める、親としての自覚を高める、私はきっかけづくりになるんではないかと思っています。
　課題です。さまざまな施策が清瀬でも行われています。その、それぞれの施策の情報共有や行動連携が十分ではないといった課題が挙げられるのではないかと思います。また、最も支援が必要な保護者を、施策につなげる戦略やシステムが不十分であるということ。保護者会を開いても、どうしても支援の必要な方々は足を向けてくれません。そこを、どう掘り起こしていくべきなのか。
　また3点目、法は家庭に介入すべきではないとか、国や行政が家庭教育に介入し、その特定の価値観を押し付けるべきではないといったような一部の主張がございます。これはイデオロギーと言っても、私はいいんではないかと思いますが、やはりわれわれが、今まで家庭支援が充実できなかった1つの要因ではないかと思っています。
　また4点目。これは当然教育だけでは解決できず、市長部局、地域社会を含めた総がかりで取り組むべき問題である。だから、私は、この総合教育が、非常に取り上げる価値のある、十分価値のある課題であると思っております。
　また、国が提唱するシステムで、家庭教育支援チーム等々のものがあるんですけれども、これが、正直言って形骸化をしている。やはりシステムをつくっても駄目だということです。どういうふうに、そのシステムに情意的なやり方をするか、ハートを込めていくか、魂を込めていくかという問題ではないかと思います。
　まず、たたき台として、提案を行わせていただきます。やはり地域総がかりで、この意識の啓発を図っていくために、子育て教育フォーラム等々を実施していく。多くの保護者の方々に、市民の方々に、その家庭教育の重要さ、もしくはその具体的な方策・方法等についても、理解していただく機会があっていいんではないかと。教育委員会と市長部局が共同して、フォーラムを実施するということも、1つの方法であるわけなんです。

　また、教育相談センターと子ども家庭支援センターの情報共有会議の開催。これは今でもやっているんですけれども、もう少し機能を拡充して行ってもいいんではないかと思います。
　また、子育て関係民間企業と連携した親の意識実態調査等々。これも、やはり実態が分から

ずして、手を打つことはできません。親がどう思っているのか。何が苦しいのか。何が問題なのか。そこを、われわれはちゃんと把握した上で、施策を打っていく必要があるんではないかという提案です。
　また、学校支援本部。これは、教育委員会所管の機能でございます。生活支援コーディネーター。これは、福祉部局の機能でございます。これは、同じような機能がたくさんございます。これらの資源を共有化していくべきではないかということです。既に一部では、学校支援本部のコーディネーターと生活支援コーディネーターが、共同してプロジェクトを行っている例もございます。
　また、唐突ですけれども、食を通した家庭への啓発ということを書かせていただきました。これは、やはり食というものは家庭の根幹でございます。ここを何らかの形で、われわれがアプローチをすることによって、状況を改善できるのではないか。具体的なお考えは、後ほど、また伺いたいと思います。
　最後です。家庭教育啓発プロモーションビデオ等々を制作していくというようなことも考えられるのではないかというふうに思います。
　これは、実は私が親になったときに、病院の先生から言われた言葉です。この言葉を、紙に書いてプレゼントしてもらいました。「子どもが生まれたから親になるのではない。時に笑い、時に泣き、時に感動し、時に失望し、時に希望を持ち、時に絶望にさいなまれ、行きつ戻りつ、右往左往しながら、子どもと共に成長して、初めて親になる」と。私はこれを、病院の産科の先生から、このメモをもらったんです。今でも大事に取ってあります。何回も見直します。
　もう一個、何回も見直す、これもビデオがございます。
＜動画視聴＞

（坂田教育長）
　これは、タイのdtacテレビというテレビ会社のコマーシャルなんです。私は、このコマーシャルは、何度見ても胸が詰まるんです。この思いを、われわれはちょっと忘れちゃうときがあるのではないかと。たくさんの保護者に、私は見ていただいて、考えて、感じていただいて、考えてもらいたい、何か1つの材料ではないかと思っています。
　長くなりました。それでは、議論に入りたいと思います。家庭の教育力を高める方策についてということで、活発な意見を交わしていきたいと思いますので、皆さま方、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。
　では、今の私の……。いいですか。私の提案を見ていただいて、受けていただいて、感想でも、思いでも結構です。また、ご自身の具体的な、高める方策でも結構でございます。議論を交わしていきたいと思います。
　まず、粕谷委員から。

（粕谷委員）
　はい。

（坂田教育長）
感想でも何でも結構です。どうぞ、ご発言ください。

（粕谷委員）
最後の動画を見せていただいて、実は何か涙が出てきちゃったんですけれども。自分のときのことを思い出しました。いきなりお話しする内容じゃないのかもしれないですけれども、家庭の教育力は、結局、最後はここですよねというふうに思います。何を用意してあげるとか、何を与えてあげるのかではなくて、親自身が子どもに直接どれだけ関わって、直接何を与えてあげられるのか。それが、なかなか難しい時代になっているからこそ、今日の会議があるんだと思うんですけれども。まずは、素晴らしい映像を見せていただいて、ありがとうございました。

（坂田教育長）
　いえいえ。本当に、何をやるという話は、最後は子に対する愛を、どうやって親の方々へ、親にもう一回振り返っていただけるかというところなのかもしれません。でも、それを言ってしまったら、話は終わりですから、何らかの方策を考えていきたいと思います。
　兵頭委員、ご発言ください。

（兵頭委員）
　今の粕谷委員のおっしゃった、最後の、子どもが自分を父にしてくれたという映像ですが、確かに感動的なんですけれども。私も感動しながら見ていたんですけれども、子どもの子育てを母親1人に任せきりになっている現状があるんじゃないかということを、すごく感じるんです。
　母親が自分だけに育児の責任を負わされていて、ますます家庭内でも、なかなか相談できる人がいなくて、自分が本当に孤立してしまっているというような、母親の孤立感という。精神的ゆとりがない、というような表現もあるかと思うんですけれども。本当にもう少し、男性の育児参加なんて、今どきは言っちゃいけないのかと思うんですけれども、平等に育児に関わるというか、子育てに関わるような、そういう意識を変えていかないことには、いつまでも「男性は手助けでいいんだ」みたいな感覚だと、やっぱり女性は「子育てしよう」とか、「子どもを産もう」というようなところにもつながっていかないというのが根本的にあるかな、というふうに思います。
　その辺りで、どうしても子育てしている人というのが、もちろん父子家庭の場合もあると思うんですけれども、そういう人もやっぱり孤立しがち。そういう声を聞くところが、実際になかなかないことだとか、生活の中で相談先というのが、あるようでなかったり、そういう人こそ、そういう機会につながっていかなかったりというような、そういう難しさもあると思うんですけれども。
　基本的には、やっぱり男性も女性も、子育てには本当に責任を持って関わるという、その辺りの耕しみたいなことも必要なのかと思いました。

（坂田教育長）
　まさに今、兵頭委員がおっしゃられたことというのは、教育の範疇だけでは、これは解決できない。

（兵頭委員）
　そうです。

（坂田教育長）
　社会風土とか、もしくは社会の持つ雰囲気とか、そういうところに影響してくる。

（兵頭委員）
　そうです。

（坂田教育長）
　また、男性が育児に関われるような条件を整えていかないといけないとか、いろんな問題をはらんでいることだと思いました。ただ、孤立化を防いでいくというところについては、何らかの手は打てそうかな、と思います。

（兵頭委員）
　そうですね。

（坂田教育長）
　そこら辺を含めて、土屋委員、ご発言ください。

（土屋委員）
　ありがとうございました。SSWについても触れていただいて、大変ありがたかったです。やっぱり私もSSWとして、また、今は指導側、指導する立場になって。
　毎日、清瀬だけでなく、いろんな自治体のSSWさんの話を聞く機会があるんですけれども、非常に、課題がやっぱりものすごく多様化していて、複雑化していて、家庭の教育力というのに、それを考えるより、もっと大きなことを考えなくてはいけないような状況になっているのは間違いない、というふうに思っています。
　社会の情勢が、今回はコロナもありますし、本当に今ものすごく大きく変わっているときだと、すごく感じているので、今までの家庭の持つ素晴らしさとか温かさというのが、同じように続いていけない状況というのが、過度に個人に責任を押し付けるようになってしまうのが良くないというふうには思っていて、社会の環境といいますかね。そこら辺を理解しながら、何ができるかというのを、いつも考えながら仕事をしているんですけれども、その中でお手元に、皆さんに……。

（坂田教育長）

これは、ちょっと後で結構。

（土屋委員）
これは後でいいですかね。お手元にあるような、こういう授業なんかも関わったりして、環境のほうですね。何とか整えたりとか、変えていけるような仕組みのところにも関わっています。
もう一つ、少しだけ触れたかったのが、家庭の教育力のところで、教育長のお話にもあったんですけれども、今すごく極端になっていて、教育を与えなきゃいけないと思っている親御さんもすごく多くて、ぎちぎちに何かいろんなことをやらせたりする。それが、すごく今、「教育虐待」という言葉まで出てきていて。
私が懇意にしている先生で、武田信子先生。さっきの赤ちゃんのチカラプロジェクトなんかのベースのところの研究なんかもされている方なんですけれども、その方が出している『やりすぎ教育』という本が、最近ベストセラーになっていて、そのぐらい教育虐待についても関心が少し高くなってきている。教育を与え過ぎるというのと、あとは全く、そういうふうに教育をなかなか、教育のほうまで考えてあげることができないような、ヤングケアラーの問題もそうですけれども、そういうことが二極化しているというのは、私などは本当に常に感じているところです。

（坂田教育長）
ありがとうございます。どうしてもこういう議論をすると、社会の仕組みとかと、大きいほうに話がいっちゃうんで。そうすると、ちょっと議論が空中戦になってしまいますから、できれば、私は、われわれができることは何なのか。その一部でもいいですから、われわれができることは何なのかというところにスポットを当てて、議論をしていきたい。
あるいは、今、土屋委員がおっしゃった、このシステムづくりですね。このホームスタートということについては、後ほどまた詳しくご紹介ください。

（土屋委員）
はい。分かりました。

（坂田教育長）
これも、家庭を支援していく1つの機能であること、ということであります。
職務代理者、ご発言いただけますでしょうか。感想でも何でも結構です。

（宮川職務代理者）
はい。お話を始める前に、一言ご紹介というか、市長さんにぜひお伝えしたいことがあったんですけれども。今、教育委員会は、事務事業の点検評価で今回のレポートを見せていただいたときに、市の職員の方々が、本当に評価というものは何なのかということ。それがしっかりしてくると、さまざまな事業の問題点とか改善策が見えてくると思います。

そういう点で、本年度というか、昨年度の事業報告の評価ですね。それを、今の宮本課長さん以下が一生懸命なさっている。部長さんは、今は代わられたということで触れませんでしたけれども。そういうことを原点におきまして、この事務事業の評価というのは、一番今回見えてきたのは、教育長も今日お話をされていましたけれども、部局間とか、それからさまざまな団体との調整とか、あるいは協働ということが、成果として上がってきているんだなと思いました。だから、清瀬の行政の質の高さというのは、そういうところに表れてきているんだと思っています。

そういうことで、実はこの家庭教育をどうしなくちゃなんないかというと、どちらかと、これは今まで、行政は、家庭教育にはなかなか入り込めないんだけれども、私は違うと思っているんです。もっと行政の責任としてやることがあるだろうと思っています。

先ほど、教育長が、食育とお話しされました。例えば学校は、あれだけの資源エネルギーを使って、子どもたちにおいしい食事を提供しているわけです。これを家庭で、ぜひまねていただくとか、何かそういうアイデアと、何か方法はないか。これは、宮本教育総務課長？

（坂田教育長）

そうです。

（宮川職務代理者）

宮本課長さんと、先日少しそんなお話をしたら、いろんなアイデアがありそうなので、学校は、ホームページに今日の給食を写真で紹介するだけじゃなくて、そういう紹介がてら、家庭でもやってみませんかと。味はどうでしたかとか、そういうのを、もっと広く知らせていくことによって、そういう文化というのかな。そういうのをつくっていくことは、今の体制で、まして今回の教育委員会の事務事業の点検評価の中で、職員の方々のすごく力が伸びている。失礼な言い方かもしれません。だからこそできるんじゃないか。

だから、そういう学校給食というものの取り組みを生かした、家庭教育への波及をどうさせていくか。ここは、少し考えていますので、また宮本教育総務課長さん等とお話をさせていただいて、実現できればと思っています。

それから、やっぱり読書。清瀬は、それに力を入れていると思うんです。いろんなデータ。過去の、国の機関の読書の傾向調査と、それから成人になってからの収入だとか、そういう関連性を調べたデータがあるんですけれども、その読書というのは、やっぱり人生成功にとってはすごく作用している。こんなことを、市長さんとか皆さんに思われてることじゃないと思うんですけれども。

でも、やっぱり清瀬市は、他市とは比較にならないほど、読後感想文コンクールなんていうのをやっていますよね。やっていなかったですか。

（坂田教育長）

やっています。

（宮川職務代理者）

昨年度の作品を読ませていただいて、これだけのことを読み取って、考える子どもたちがい

るんだ。これを、全ての学校がやっぱり同じように、学校差があるので、例えばこういうのをどうやって解消していくかということが。子どもたちが、例えばおうちが経済的に十分じゃなくても、でも、そういう本を通して学ぶこと。

余計な話になりますけれども、世界の学力トップのフィンランドに行ったときに感じたのは、やっぱり家庭での読書なんです。兵頭委員もおっしゃっていましたけれども、いわゆるワーク・ライフ・バランスとか、男親の子どもの教育に、いろいろ問題が挙がっていますけれども、そういうところは、本市が今までに、1歳6カ月辺りで、そういう読書のきっかけをつくってきた。

だから、それをもう少し読んでいただいて、読み聞かせをしていただいて、親が何か思ったこととか考えたことを、また寄せていただいてという、そういうのを循環させていくことによって、そういう「読書のまち、清瀬」というぐらいの。それが子どもを育てるんだ、親も育つんだという、そういう文化づくりということに、そんなにお金をかけなくても、アイデアをどうやって具現化していくかということを考えたら、家庭支援というものを、もっと具体的にできるんじゃないかと、私は考えました。

その他の例とすると、幾つかまだあるんですけれども、例えば石田波郷俳句大会。これも、随分成果を上げています。実は、おとといですか。そちらの第八小学校に訪問しましたら、子どもたちの俳句。大会に出すためではなくて、日頃から、そういうことをやっているんです。

いろいろ作品を見せていただく中で、こんな言葉を小学生が使うのかなと。でも、実はそれは、私たちが死語、死んだ言葉にしてしまっているような言葉を、子どもは使っているわけです。

（宮川職務代理者）

馬場統括は専門家なんですけれども、その作品を見て、われわれに教えてくれたのは、「子どもたちの言葉に対する感覚が鋭くなってる証拠ですよ」と。それからもう一つは、語彙（ごい）が、言葉の数が豊富になっているということです。シェークスピアが、IQ250だとか150だとかといわれていますけれども、あれは、要するに作品で使われている言葉の数から分析して、それぐらいあったんだろうといわれているわけです。

だから、こういう石田波郷の俳句大会というものが、まだ全体的になっていないと思っています。それと同時に、特に学校が、もっと親御さんも一緒に投句してもらうとか、何かそういうことによって、子どもだけじゃなくて、親もそういう語彙を増やし、そういう語彙を増やすことが、子どもを認め、励ますとか、普段の生活の中で、やっぱりそれも語彙が豊富になることによって、子どもたちを見る目とか、見方等も変わっていくんじゃないかと思う。そういう地道なことをやっていくということもポイントなのかと思っています。

それから、この辺りは、市長のご意見もお聞かせいただきたい。これから、私の仕事に関連したですね。やっぱり就学前の教育というのをどうやっていくのか。それも、本当に失礼ですけれども、私も幼稚園教諭とか保育士を育てることをやっていますので、就職していった子たちが、辞めるとかいって帰ってくるわけです。

現状を聞いてみると、例えば辞めてくる子の中には、理想に燃えて仕事に入るわけです。と

ころが、昔ながらの託児所。ただ子どもを預かっているだけの、そういう幼稚園がある。これで、本当に未来を任せられる子どもを育てられるようなことを、われわれ大人は、仕事として、ちゃんと責任を持ってやっているのか。
　そこで、本市でも、幼・保・小の連絡協議会とかやっていますよね。

（坂田教育長）
　やっています。

（宮川職務代理者）
　こういうものの質を、どう上げていくか。そういうところに、山本園長先生のいろんなお考えとか、お知恵を頂いたりする中で、その清瀬市全体の就学前の教育というか、保育の質ですよね。いわゆる養護と教育を、どう質を上げていくかということ。これも、実は今、いろんな、申し上げたような資源とか、打つ手があるんだと思います。
　これを、やはり整理して、計画を立てて実行していったら、本当に清瀬が、かつてというか、これまで培ってきた子育て環境としては、自然環境も含めて抜群なところがあると思うんです。やっぱりそういうものを生かしたような、清瀬ならではの家庭支援とか、子育て支援とか、そういうことを考えてみていったら面白いかなと思いました。
　もっと言うと、失礼だけれども、フォーラムとか、あるいはプロモーションビデオに、私は期待していません。すみません。以上。

（坂田教育長）
　ありがとうございました。期待していないという言葉でありました。私は、打つ手はたくさんあると思っているんです。やればいいと思っています。
　山本園長、申し訳ございません。今議論してきたのを、2つに大きく分けると、親の孤立化をどうやって防いでいくのか、親への支援をどうしていくかというところと、相対的に家庭の力を上げるにはどうしたらいいかという議論に分けられるんではないかと思いました。
　例えば親の孤立化等々への個別的な支援については、スクール・ソーシャル・ワーク機能を充実させていく必要があるんじゃないかとか、また、相対的に家庭の力を高めていくためには、今、職務代理者からお話があった読書であったり、食育であったり、就学前教育の充実であったりというところがあるんではないかと。
　実は、子ども学園というのは、私は理解が薄いんですけれども、両方やられていらっしゃるんではないかと思っています。
　例えば、ホームページで紹介されていたペアレントトレーニング。これなどは、やはり相対的に親の力を高めていこうという取り組みでいらっしゃると私は理解しました。また、どうしても、障害のあるお子さんをお持ちのご家庭という親御さんは孤立化していく傾向もあるという中で、個別的な面談を行ったりというようなこともホームページで拝見いたしました。
　障害があるとか、なしとか、また虐待とか、いろいろな、チャンネルは違うかもしれませんが、親を支援していくのには代わりがないと私は考えておりますので、山本園長から、ご感想を含めて、自己紹介も含めて、ぜひお願いできればと思います。

（山本園長）
　今日は、ありがとうございます。子ども学園の園長の山本でございます。社会事業大学を卒業しまして、15年ほど精神科のソーシャルワーカーをやっておりました。後半の15年は介護保険のケアマネジャーをやっておりまして、その後、子ども学園の園長ということで、今は6年目の業務に就いております。
　先ほどのビデオを拝見しまして、子育ての、乳児を父親が抱っこしているというところを見まして、感じるところはありましたけれども、子ども学園。就学前の子どもたちは、4歳、5歳、6歳ですが、家族の養育的な問題があるご家庭のお子さんの場合は、年少よりも小さいので年々少と呼んでおりますけれども、その方がお2人ぐらい来ております。あとは、市からの、行政機関からの措置というか委託ということで、措置の子どもさんが来ていたりします。
　私たちは、子育ては親育てという視点を持っておりまして、先ほどの委員のお話もありましたけれども、男女共同参画ということで、それは子育てにもというふうにして思っております。比較的乳児の場合は、やはりお母さんにくっつくことのほうが多いですので、逆に父親の支援ということでは、入園に決定を出す場合は、お母さんだけではなく、お父さんにも見学に来ていただいて、両親の納得で施設に関わっていただく。
　あとは、土曜日はお父さんの送迎日というふうに決めておりまして、お仕事上、お休みの都合がつかなければ平日でも構わないんですけれども、お父さんの送迎をしていただく。これは、先生たちと、指導員と、お父さんのお付き合いも大事なわけです。あとは、父親を中心とした参観日を設けるとか、そういうこともやっております。
　なかなか今はコロナ禍で、お仕事はご自宅でのテレワークも多いんですけれども、家庭の収入は、やはりメインはお父さんになると思いますが、体が大きくなってくる子どもについては、お父さんでなければ対応できないこともありますし、お母さんの補助的な業務というかお仕事も、家計も、家事もあると思います。
　私たちの職場でも、今、お父さんが子ども、子育てに関わることの意味というのは、制度的にも労務的にも必要かということで、子どもの看護休暇を積極的に取らせてあげる。あとは、有休の中での時間有休を子どものために使いたい、ということを結構まめに言ってきますので、それは認めてあげるようにしております。
　就学前の教育ということは、児童福祉法にのっとった施設ですけれども、体づくりとか、あとは生活力づくりとか、知的な興味とか、集団的な行動だとか、そういうものを構造化の中で、感覚統合で発達支援をしているわけですけれども。
　親の支援に戻りますけれども、児童発達支援センターは、元々子どもの発達支援と、保護者支援と、地域支援が三つどもえ。そのバランスをもってするのがルーティン業務でありますので、親御さんの相談を丁寧にすること、子どもの成長を伝えてあげることが、直接・間接の親支援になっているかと思います。
　ただ、具体的なプログラムを擁しておく必要があるということで、先ほど教育長がおっしゃったペアレントトレーニングを、隔週で半年間、初めて入園される保護者にはしております。これは5～6人のチームに分かれて、ペアカウンセリングにもなっておるんですけれども、大体子ども学園に来る子は、保育園・幼稚園に入れられなかった。もしくは、途中で「うちの対象の子でありませんね」と言われて来た子ということで、少しブルーな気持ちで入ってくる親御さんが多いんですけれども、どうしてもそういうお子さんのお母さんのお気持ちをまずくんで、家族。ご主人や、おじいちゃん、おばあちゃんの理解があったりも、時にはするんですけれども、それでの孤独とか、それを仲間内でシェアしていくということ。
　それで、この障害や発達系の軽度の子もおりますけれども、その特性は、その子が悪いわけではなくて、また、お母さんの育て方が失敗でも何でもなくてですね。でも、そのお母さん、

お父さんからの関わり方を変えていただくことから始めていこうということで、接し方から、障害の受容から、そこら辺をサポートしています。
　そのピアサポートということでは、卒園のお母さんたちに、小学部のお母さん、中学部のお母さん、高等部のお母さんに講師で来ていただいて、子ども学園に入るまでの複雑な気持ちと、入ってからと、それから、児童期、小学・中学・高校に行ってからの親御さんの、その都度の揺れ、思春期の問題。そういうことを、在園のお母さん、お父さんの前で話をしていただくことがあります。
　これは、見通しを持たせる。子育てを楽しく、夢を持ってしていただくために、見通しが持てると、お父さん、お母さんたちの不安も少なくなりますので、そういうようなことから、そういう企画を設けていたりします。
　月例保護者会ということで、毎月あったりしますので、お母さんの就労という意味では厳しいところもありますが、就学前の大事な時期を、お母さんを中心に子どもとの接し方、障害や特性の付き合い方。そこら辺のノウハウを、一緒にロールプレーなどをしながら体験していただくようなことをしています。
　それで保護者のメンタルの検査などをさせていただくんですけれども、大体鬱的な傾向のお母さん方、お父さん方が多いんですが、そのペアレントトレーニングの後はだいぶ……。まだおむつが離れていませんので体は疲れていますけれども、気持ちの部分は、だいぶ軽度になっていかれている傾向があります。大ざっぱですが、そのような。

（坂田教育長）
　ありがとうございました。ペアレントトレーニング、ピアサポート、こういう1つのプログラムですね。

（山本園長）
　はい。

（坂田教育長）
　こういうようなものを導入することによって、いわゆる孤立感を防いでいったり、もしくは総合的な親としての力を高めていったりする、というようなお話もございました。また、個別的には、やはり草の根的に、丁寧に接することによって、保護者の孤立感、もしくは家庭の教育力が高まっていくんではないかというようなお話だったと理解しています。
　これから、少し深掘りをして議論をして、具体的に、われわれ清瀬は何をやるかというところに言及していきたいと思いますが、その前に、市長から、ここまでの議論を聞いて、ご感想で結構です。もしくは、いつもお話しになられていたりしていることを、われわれの前で話していただければと思います。お願いします。

（渋谷市長）
　家庭の教育力といったところで、人間が育つ現場中の現場だ。何が一番大事かというのは、決まっている。愛だ。

（坂田教育長）
　そうですね。

（渋谷市長）
　本物か偽物か、取ってつくって付けたものか。愛の力というのは、いい子だから愛する。悪い子だから、「何やってるのよ」。そういう見方をしているのは愛じゃない。そのままをしっかり受け止めて。だから、愛着障害では、抱き上げてあげるとどんどん発達ホルモンが増加して、何か機能が働いてこない子でも、抱き上げてあげていると、そういうところにも作用していくという愛着障害の本がある。
　私も自分で体験してきているから、かみさんには頭が上がんない。だから、他の子どもが起こした問題については、全てこちらが出ていって謝ってきたりとか、そういうふうにやってきたからね。
　だから、卒園式のときには、道が外れるのは、皆さん、お父さん、お母さん、当たり前なんですよ。外れたときに、どう親が対応するか。プライドは捨てなさいよ。子どものために、自分の偉そうな態度は捨てなさい。そうしたら、子どもは必ず戻ってくるから。そういうことをいつも言っていて、自分でそういうふうにしてきたからね。子どもが起こした学校での問題には、かみさんに謝らすなんか言わない。こちらが全部言ってきたんだから。
　常に子どもを守るために、体裁とかそんなものは捨てて、ちゃんと動いていれば、時間はかかっても、必ず子どもは本物の愛に向かってくる。そういう体験をしているから、やっぱり、まず現場中の現場で、愛を大事にする。それで清瀬。風土でもやっぱり愛を大事にする。
　この人にうまくやっときゃ、流れはうまくいくとか、そんなふうに計算ずくじゃなくて、市民全ての人に向かって、それはいろいろな人がいるけれどもしょうがない。全ての人に向かって、やっぱり分け隔てない対応をしていく。こういう市役所、あるいはまち全体がそういうふうになって、変わっていく。変わっていく要素として、石田波郷俳句大会で子どもの言葉が増えてきていると。直接つながっているわけじゃないと思うけれども、そういうふうに影響力を出してきてくれるんじゃないかと、そういうことを信じていこうという、そんな印象を持っております。

（坂田教育長）
　市長、もう一個、お金くれという、あの話をしてください。

（坂田教育長）
　「おっかねえ、おかね」という、ほら、障害のある子に……。

（渋谷市長）
　「おっかねえ、おっかねえ」か。

（坂田教育長）
　はい。まさに園長がご自身でやられてらっしゃる、障害のある子ですね。

（渋谷市長）
　そう。だから、それは3歳のときに、本当に言葉を話せない。目はふらふらしている。多動、完全に自閉症の子だった。同じように、私は子どもと遊び回るのは大好きだったから、たら両遊んでいた。それも選んでいるんじゃなくて、全ての子どもです。
　それで肩に乗っけて、揺さぶったり。それで1年後ぐらいに、その3歳のしゃべらなかった自閉症の子が、突然、「お金やって」と。「え？　小遣い？」と2～3秒はそう思ったけれども、「あ、おっかねえか」と。だから、肩のところに上げて揺さぶりながら、「おっかねえ、おっかねえ、おっかねえ」と。それが、子どもがとても、実際にこんなふうにやられるのだから、それでも、やっぱりそれは、ものすごい楽しかったんだろうな。
　とにかく1年後に、自分のほうから、自閉症の子が話し掛けてきた。それ以来だから、本当に成長の力というか……。それで、今は大学で臨床心理学か何かで勉強して、年賀状で、「今、そういうところにいます」という手紙を書いてきてくれたけれども、そういうのもある。
　だから、たまたまおととい、かみさんが、八王子で幼児教育の教材の会社でジャクエツというのがあって、それで金澤翔子さんが……。ダウン症の子が36ぐらいになるの？

（土屋委員）
　書を書く。

（渋谷市長）
　すごい書を書く
　「共に生きる」とかね。だから、ふせさんに…。昨日、佐々木さんと会議で一緒だったから、こういうリーフレットだけ。「これ使っていいよって、由女さんに言っといてくれ」と。こんなわけで、すごい字をさまざまに書いていて、「いやあ」と思ってね。
　これもお母さんが、やっぱりこの文章の中では、「1,000人に1人のダウン症児を授かり、涙に暮れて、障害の告知を受け、長い間悲嘆の淵をおろおろとさまよっていた。今の医学では治らないと知り、神に奇跡で治してほしいと一心に祈った。『もし奇跡が起きて、治る証しを見せてくれたら、私の全てを差し上げます』と祈った。命と差し替えでも構わなかったけれども、ついに奇跡は起こらず、今でも翔子はダウン症者である。無情の中で、『せめて翔子が10歳になるまで、私を生かしてください』、10歳になれば、『どうぞ20歳まで』と祈った。そして今、翔子が30歳を超え、すてきな娘に成長し、見事に1人暮らしをしている。このけなげな姿に、私は神に感謝の祈りをささげる」というようなことを、おととい。私は行かなかったけれども、八王子であった。ジャクエツ。いろんなところで、こういうことを、この彼女がやっているみたい。
　だから、障害も1つの人間を育てる力。あるいは愛が本物であるかどうかを、周りに正していくんじゃないか。清瀬は、そういう障害者の施設は多いですね。そういうことも、本物かどうかということを、地域に向かって発してくれているんじゃないか。だから、そういう清瀬の力をしっかり身に付けて、続いて、この7月15日のコラムね。

（坂田教育長）
　3本の木ですね。

（渋谷市長）
　今回は、武谷病院のピニロピ先生。10歳に……。あれは、とにかく父が、天皇みたいな人の守衛だったから、ロシア革命で逃げてきて、日本へ向かって、何かその途中で生まれてみたい。それでハルピンか、朝鮮のほうに、10歳近くになるまでいて、会津若松に移ってきて、会津若松で、とにかく親しい友達が亡くなって、それで医者を目指すと。「英知とは、人類の幸せを実現するためにあるのではないか」と医師の道を進む。ピニロピ先生。
　このピニロピの名前の意味が、純愛を意味するギリシャ神話で有名なトロイ戦争の英雄、オデュッゼウスの貞淑な妻の名前だそうです。ピニロピ。そういう純愛を意味する武谷病院の、ロシア人のお医者さんが、4～5年前にもう亡くなっちゃったけれども、清瀬にいてくれたというのは、やっぱり清瀬に、ある意味純愛を育ててくれたんじゃないか。そういうこともありがたいことだ。こんなことは知らなかったけれども、今回は、とにかく7月15日はピニロピ先生。

（坂田教育長）
　分かりました。楽しみにしてます。

（渋谷市長）
　あとは、コニーネがリハビリ病院。リハビリの初代教育部長だった。このコニーネ先生は、イラン革命か何かで、やっぱり皇室の一族か何かでアメリカに逃げて、アメリカでお医者さんになって、リハビリの専門家として、東京病院附属リハビリテーション学院の初代教育部長で、2～3年、とにかく清瀬にそういう専門家を育てた。
　そういう先生もいるわけで、本当に清瀬の力というのはすごい。だから、清瀬から、この……。これが、放っておいたら、デジタル人間になっていっちゃうんだから。スマホだ、人工知能のロボットだ。デジタルで、旧約聖書にも書かれているように、人間は、やっぱりわがままになるほうが、生きているときは楽しい。我欲の塊。何も考えないんだ。自分の喜びだけで生きている。そういうところだというふうに、旧約聖書にも書いてくれている。それは、中島先生の旦那の神父さんが教えてくれた。
　そういうことに向かって、今、何かとんとん拍子に、ハロウィーンのばか騒ぎを見ていると、そちらのほうに行っちゃうというところで、このコロナ問題。何か人類を指導しているんじゃないか。全体的な流れとしては、非常に重要な場面で、人類を覚醒させるために。だから、こういう行政は、まさに愛のまちだというところをつくり出していきたい。

（坂田教育長）
　ありがとうございました。非常に私は、市長が幼稚園の、まさに子どもを指導するお話というのは、よく市長から伺いますけれども、そこには、情意的な言い方ですけれども、本当に愛

があるなと私は思うんです。やっぱり一人一人の子どもが夢を持てるということは、すごく大事なことだと思っていて、それが、先ほどの「おっかねえ、おっかねえ」という話にもなっていったんではないかと思います。

（渋谷市長）
そう。

（坂田教育長）
　また、今、ピニロピ先生のお話も出ました。医療と家庭支援は、どういうふうにつながるかと思って聞いていたんですけれども、やはり家庭支援の一番の根っこは医療だと私は思います。精神的に病んでいる方も医療にかからなければいけないし、やはりその医療の尊さを知るということが、私は家庭支援につながっていくんではないかと思いますし。
　また、これも市長がよくおっしゃっている「清瀬の力はすごいぞ」ということを、市民が思いを共有することによって、物理的なつながりではない心のつながり。だからみんなが、7万4,000市民が、清瀬のすごさというところで心のつながりが持てるということが、本当の意味での家庭支援の基本になってくるんじゃないか。「こんなすごいところなんだから、1人も取りこぼすのやめようよ」と、「あの家困ってるから、支援してあげようよ」というところにつながっていくんじゃないかと思いました。
　今の市長のお話というのは、私は全て今日のテーマにもつながっていくものであると考えます。
　先生、職務代理者。ピニロピ先生のお話は、職務代理がだいぶ研究されていらっしゃいましたので、一言だけ。

（宮川職務代理者）
　やっぱり会津若松というのは、自分の生まれた福島県。

（渋谷市長）
　え？　そう。

（宮川職務代理者）
　はい。

（渋谷市長）
　やっぱり縁があるんだな。

（宮川職務代理者）
　はい。それで、私は相馬藩ですから、けんかしていた一方で、負けたほうですから。どうで

もいいんですけれども。やっぱりあの時代に、彼女がシベリア鉄道の中で生まれているんです。

（渋谷市長）
　そう。

（宮川職務代理者）
　ああいう人を育てた日本の文化とか、そういうものを、もう一度見直してみる必要があるんだろうと思っていて。先ほど八小での、この俳句の取り組みが、どれだけ、今市長が申し上げられたデジタル人間。どうしてもなっていくんだろうと思うんですけれども、本当に大事なのは、そのデジタル人間も、やっぱり言葉をどれだけしっかり持てるかということだと思います。
　だから先ほど、私はどちらかというと、そういう現実的な対応をどうするかということなので、今やっている読書とか、俳句とか、そういうものをもっとしっかりやっていって、これが本当に、今議論になっている親の教育なのか。それとも放置なのかとか、いろいろある。二極化と言っていましたけれども、そういうところにくさびを打ち込むのが、それかなと思っている。だからこれを、読書とか、この俳句とかというものを、どれだけ市民の皆さんと一緒にやっていくような文化をつくっていくか。
　それは、ですから冒頭に、こういう点検評価ね。近々市長のお手元に届くと思うんですけれども、これの最初に、なぜこういうものをやるのかという。そういうことを、今回は記録されているんで、職員の皆さんの、本当の資質・能力の向上にもつながっているということなんです。
　だから、これだけのことをできる。いわゆる評価というのは、やっぱり組織をつなぐ。人をつなぐんだと思う。だから、こういう清瀬市なんですから、やっぱり先ほどの申し上げていることをやって、それから今、コミュニティースクールをやろうとしていますね。そのコミュニティースクールの中身というのは、やっぱり家庭を支援する要素はいっぱいあると思っているんです。
　だから、そういうことをもう少し明確にして、また、これを本市が、今、本当に進められている学校支援本部。あとは、今お聞きしていると、連絡会議というのは、どういうふうにこれから中身も、もっと刷新できるかとか。そういうことによって、先ほどの親御さんに、自分の子どもと一緒に本を読んで、その感性を豊かにしていくような、そういうところを、どうやって連絡会議のメンバーの皆さんとか、学校支援本部のメンバーの皆さんに、そうやって働いてもらうというか、活躍してもらう。その絵をきちっと構想していくべきかと。
　最後になりますけれども、私は、統計というものにだまされていたと思っていた。つまり、少子化の合計特殊出生率。清瀬市は、今1.2ぐらいですかね。

（渋谷市長）
　はい。

（宮川職務代理者）
　でも、何でこんなに数値が小さいのと思うんですけれども、結局は、子どもを産む大人と、子どもを産まない。これの二極化が広がっている。

（渋谷市長）
　そう。

（宮川職務代理者）
　ここのところに、どうやって手を打つのかというと、やっぱりそうやって子どもを産み育てることが、本当の幸せであったり、愛であったり。「これがなかったら、人類はとっくに滅んでんじゃないの」という見方とか、そういうものをどうやって、これから大人になる人たちにも伝えていくか。そこのところが、今、本当にこの清瀬市が人口減で、どんどん財政的にも何も破綻していくのか。でも、逆に、本当に優れた町になるかというのは、やっぱり今日の市長からお話のあった、この家庭支援をどうやっていくかというところ。これを一点突破で、やっぱりやっていくことかなと思いました。長くなってすみません。

（坂田教育長）
　ありがとうございました。

（渋谷市長）
　人口は、ぐーんと上がっているんですよ。

（宮川職務代理者）
　はい。知っています。

（渋谷市長）
　5月で7万5,000人を超えた。

（宮川職務代理者）
　はい。

（渋谷市長）
　世界92カ国から、清瀬に移り住んでいる。全体が2,000人。1,500～1,600人か？　そういうところも、何か不思議だなと。だから、しっかり見ていて、いいところにしっかり光を当てていくということが、エネルギーをつくり出していくんじゃないか。

（坂田教育長）
　ありがとうございます。私の進め方があまりよろしくなくて、少し理念的なところに走って

いますので、もう少し具体策のところに深掘りをしながら、残り15分ですけれども、議論して、結論付けたいというふうに思います。
　今までの議論を整理します。やはり、親の孤立化というところが問題であろうと。その孤立化を防いでいくためには、どうしたらいいだろうか。もしくは、やはりなかなか支援の手が回らないようなご家庭に、どういうような形で支援をしていくべきなのか。
　1つの方策としては、やはり父親の育児参画という話が出ました。これは、山本園長、誰でしたっけ？お父さんが迎えに来る日でしたっけ？

山本園長
　はい。

（坂田教育長）
　お父さんの送迎の日をつくるとか、父親の何か研修会を開くとかというような。

（山本園長）
　参観日です。

（坂田教育長）
　参観日ですね。

（山本園長）
はい。

（坂田教育長）
　参観日を設けるとかというような方法論があります。また、これは粕谷委員にお伺いしたいんですけれども、芝山小学校は、多分おやじの会のようなものがあったと思うんですけれども、それはどうですか。サッカーチームでしたっけ？

（粕谷委員）
　そうです。キックサッカーというのが。おやじの会があるのは六小です。

（坂田教育長）
　六小ですかね。

（粕谷委員）
　はい。

（坂田教育長）
　芝小は、ある意味では、サッカーを核にして、お父さん方が集まって。

（粕谷委員）
　そうですね。おやじの会ほど、もしかしたら広くないかもしれないですけれども。

（坂田教育長）
　そういう草の根的な、お父さんが関われるようなシステムを、各学校でほんの少しずつでも進めていくということは、1つの方策かと思うんだけれども、兵頭委員。そこは、問題提起された兵頭委員から、そのおやじの会的なもの。学校行事ができるのは多分そこじゃないかと思うんだけれども、どう思われますか。

（兵頭委員）
　そういう取り組みがあると、すごく参加しやすいとは思います。漠然と、どう関わっていいかとか、また父親同士のつながりというのも、なかなかできにくいと思うので、やっぱり具体的な体験の場とか、そういうものがセットされていたほうが参加しやすいというふうに思います。

（坂田教育長）
　なるほど。ということは、今機能している六小のおやじの会から、ノウハウを聞いてみるというのも1つの手かもしれませんね、兵頭委員。

（兵頭委員）
　あとは、支援本部ですよね。支援本部でいろんな活動を、今はコロナ禍でできていない部分もあるんですけれども、そういう中でお父さんの参画を促せるものはいっぱいあると思うので、その辺りの工夫もいいのかというふうに思います。

（坂田教育長）
　なるほど。学校支援本部というチャンネルで、お父さんたちが参画できるようなイベントを組むとか。

（兵頭委員）
　そうですね。新たに、また別におやじの会というよりも、今支援本部がどの学校にもあるぐらいの状態になっているので、その中で、そういうものを取り入れていくというほうが現実的かというふうに思います。

（坂田教育長）
　それは1つの方策かもしれません。それは、ぜひやってみる価値があると思います。どうもありがとうございます。
　もう一点は、やはりこれは市長からご提言があった、7万5,000市民の心を1つにしていくという。そこで、ネットワークを組みながら、こぼれそうになっていく親を救っていくという、もう一つの少し大きなチャンネルですけれども、それがあるのではないか。これは職務代理から、俳句という方法論があるかもしれない。もしくは、読書という窓口が、食という窓口もあるだろう。そして、市長からは、医療という窓口がある。そういうようなご提言を頂きました。何かこれを具体……。

（渋谷市長）
　ウイズアイ、ピッコロは？

（坂田教育長）
　ウイズアイ、ピッコロ。そうですね。ウイズアイ、ピッコロというようなNPO法人の力も使える。ここは、何か1つ手を打っていきたいと思うんですけれども、土屋委員、何かいいアイデアはないですか。心を1つにして、みんなを高めていく。この、もしかしたらホームスタートも、それの耕しの1つになるのかもしれない。

（土屋委員）
　そうですね。

（坂田教育長）
　このホームスタートを、これはピッコロがやられていらっしゃる？

（土屋委員）
　そうです。ピッコロです。

（坂田教育長）
　事業で。

（土屋委員）
　はい、事業です。

（坂田教育長）
　この、いわゆる家庭支援のネットワークをつくっていこうという取り組みだと思うんだけれども、ご説明いただけますか。

（土屋委員）
　じゃあ、お手元の資料を見ていただきたいんですけれども、後ろのほうです。19ページ辺りに、このホームスタートの、どういうものなのかというのを書いてあるんですけれども、イギリス発祥のボランティア組織なんです。家庭に、別に専門家ではないんですけれども、子育てを手伝ってくれる方が入っていくというところで、日本でも2009年からスタートしています。
　清瀬市のピッコロさんが、相当早い段階でこの活動を開始していまして、本当に、17ページにあるように写真。「都内のホームスタートの仲間が清瀬に集合」と書いてあるんですけれども、都内でもすごく、相当活発に活動されています。
　そこで、実は今までは、乳幼児の方の手助けが欲しいというような家庭に対してボランティアとして入っていたということだったんですけれども、この家庭支援センターのほうとも連携して、いろいろとホームスタート以外の事業もピッコロさんはやられているんですけれども。今回は、学齢時の子どもたちに対して、もう少し家庭訪問支援みたいなことができないかということで、代表の西郷先生にお声掛けしていただいて、清瀬を舞台にして、その学齢時の子どもたちへの家庭訪問の、プログラムをつくるための試行をしてみましょうということで、教育委員会と子育てのほうの部局の本当に両方で、子ども家庭支援センター長も入って、教育長も入って、何回か会議を開きながら、この学齢時支援。学齢時の子どもたちのプログラムの開発というのを、今やっていまして。
　コロナがあったので、少し遅れてしまったんですけれども、今年度も実はやっております。それの、昨年度の報告、これ本当、全体の報告書なんですけれども、その中で14ページから、それについて書かれています。
　そこのところを見ますと、モデル地域で、なかなかコロナで、家庭訪問支援を、実は15から20ぐらいの家庭に入りたいという話はあったんですけれども、実際には1年間で8家庭に。1年といっても、本当に半年ぐらいしか時間がなかったんですが、家庭に入ってみて、いろいろと調査みたいなことをやった結果、多子家庭の利用が多い。子どもが多い家庭が、やっぱりそういうニーズがあるということが少し分かってきた、というのがあります。
　ここをお読みいただくとうれしいんですけれども、この教育と福祉がNPOと一緒になってそういうことを、試行事業ですけれども、試行したというのは、すごく大きな出来事。これを全国に広げるために、今、清瀬がモデルでやっているというところです。
　見ていただいて、16ページから、そのピッコロさんの理事長の小俣さんがインタビューを受けていて、その清瀬の状況なんかも言ってくださっています。
　17ページのところに、多子家庭支援の活動内容や感想があるんですけれども、話をする、一緒にいるとか、それから、他のすごく、なかなか他の支援を本当は受けなきゃいけなかったようなご家庭が、この支援をきっかけにして「ちょっと他の支援も受けてみようかな」みたいになっていった例とかもありました。子どもの遊びとかも一緒にやったり、親子の関係づくりやったりというようなことが出てきているので、こういったことを清瀬発祥でやっているというところが、やっぱりすごくアピールと言うと変ですけれども、全国に広げるときに、子育ての町としてというところも、少し対外的にお話しできるんじゃないかと思って、一生懸命、今これに取り組んでいるところです。
　だから、具体的に、そういう本当に地域の力と行政の力。共同していくということですよね。

重要かなと思いました。少し長くなってすみません。

（坂田教育長）
　ありがとうございました。今、お話が土屋委員からあったように、このホームスタートという仕組みを使いながら、それぞれの家庭に、草の根的に支援をしていって、その支援をされた方が、また今度は循環して支援に回るような立場。

（土屋委員）
　そうですね。

（坂田教育長）
　これを、われわれは循環社会と呼んでいるんですけれども、そういうような仕組みに発展していけばいいなと。

（土屋委員）
　そうです。

（渋谷市長）
　仕組みはできている。社会事業大学。

（土屋委員）
　そうです。

（坂田教育長）
　そうですね。

（渋谷市長）
　学生が全国から集まってきて、清瀬の生活体験。

（渋谷市長）
　学童クラブでは、何だこうだと、いろいろ社大の学生が手伝ってくれている。

（土屋委員）
　そうですね。

（坂田教育長）
　そのとおりですね。

（渋谷市長）
　清瀬の現場を知ることによって、本当に社大の学生の人たちも、愛が豊になってくるんじゃないかなと。

（坂田教育長）
　山本理事長。ぜひ、学長によろしくお伝えくださいませ。
　あとは今、ここまで、学校支援本部の活用、父親の参画できるようなイベントを組んでみるとか。また、山本園長から少しお話しいただいたペアレントトレーニングみたいなものを、やはりこれは障害のあるお父さん・お母さんだけではなくて、われわれの通常というか、一般的な研修の中でも使えるんではないかと私は思いますんで。
　例えば第六小学校なんかは、今、地域に向けた研修の場を設けているんです。学校支援本部が、意図的にそういう場を設けている。そういう中に組み込んで、試行してみるというのも1つの手かもしれない。ぜひ具体的な方法等について、また山本園長からご示唆を頂ければと思います。それが1つです。
　もう一つは、これは宮川職務代理からお話があった、俳句・読書・食育というようなところなんです。実は先日、秘書と一緒に石田波郷俳句大会の事務局の方とお会いしまして、そのときに少し議論になったのが、教育委員の皆さま方には報告していませんでしたが、実は学校で行われる俳句教室に保護者を入れたらどうだ、地域の方々にも見てもらったらどうだとかという話だった。
　実は、俳句は、ちょっと頑張っているという市民の方々にようやく分かっていただきつつあるんですけれども、やはり自分が第三者的な立場ではなくて、第二者になっていただいて学んでいただくという機会が、あそこにはあるんではないか。試行的にやってみる価値はあるんではないかと思うんだけれども、粕谷委員、どうですか。

（粕谷委員）
　保護者が参加して？

（坂田教育長）
　保護者が参加する。子どもたちと一緒に俳句を作る。

（粕谷委員）
　それは授業の中でということで？

（坂田教育長）
　授業の中で。

（粕谷委員）
　それが、もし、これまでのお話からすると、その保護者というのを、より父親に特化して声掛けができれば、先ほど出ている男性の子育て参加というところも含めて、より効果があるのかというふうに。もちろん、お父さまじゃない方が参加することはいいと思いますけれども、そこに加えて、意図的にそういった形にすると、よりいいのかというふうに、今お話を伺っていて思いました。

（坂田教育長）
　ありがとうございます。父親の参画を含めることによって、先ほどの父親の育児への関わりというものも、そういう文化が醸成されていくだろうと、一石二鳥を狙うわけですね。

（粕谷委員）
　そうです。そういう機会というのは、自然に促せる形なのか。

（坂田教育長）
　サッカーと同じような、機能があるのかもしれませんね。

（粕谷委員）
　そうですね。あくまで、強制されるよりも、なるべく自発的に参加していくというところが必要。

（坂田教育長）
　そこは、元校長先生だった、やっぱり兵頭先生に伺いたいんだけれども、そういうことを学校にお願いをして、地域や保護者に開いてくれるもんでしょうか。

（兵頭委員）
　今までも、学校公開の日に、その俳句教室をやって、保護者の、または地域の参加も自由とかという、そういうふうに開いている学校もあったと思うんです。特に低学年なんかは、よくそれをやっていたと思うんですけれども、それが大きな学校の広がりまでには、まだなっていないかと思うんですが、やること自体は、そんなに難しいことではないと思います。

（坂田教育長）

難しいことではない？

（兵頭委員）
はい。やっぱり俳句が、それだけ市民の人にも関心が出てきたというのは、市の広報のところにも、子どもの俳句が出ていますよね。私はあれがすごい効果的だと思っていて、市報を頂いたときに、いつもあそこは見るんです。だから、やっぱり子どもたちの作品が市民の目に触れるということも、すごく大事だなというふうに思っていて。
例えば健全育成の作品なんかも、発表が終わった後に、いっとき展示なんかをしますよね。あのような展示スペースみたいなものが、市の公的な所に少しあったりすると、また俳句でも、その感想文でもいいですけれども、そういう子どもの作品みたいなものに、非常に市民の人も関心を持って、学校は今こういうことに取り組んでいるんだなというのが、すごく分かりやすいというふうに思います。

（坂田教育長）
それで、その実行委員の方々が、「せっかく市役所がきれいになったんだから、市役所の上に、波郷の俳句大会で表彰された優秀作品2編だけでもいいから飾ってくれ」と市長、言っていましたよね。

（渋谷市長）
うん、

（坂田教育長）
ぜひ、これは市長部局の総務課にお願いしたいと思っていますけれども、ぜひ検討いただければと思います。俳句というのを1つのチャンネルにして、底上げを狙っていく、相対的な家庭の力を高めていくというようなことも、1つ、今議論になりました。
ホームスタートについては、市長、トライアル的な位置付けになっていますけれども、全面的に教育委員会が、今、これをバックアップしながら、協働、手を組みながらホームスタート・ジャパンと一緒にやっていますんで、ぜひこの成果は、またご報告申し上げたいと思います。
最後になんですけれども、スクール・ソーシャル・ワークの話がありました。これは、山本園長も、土屋委員も、スクール・ソーシャル・ワークというのは、やはり重要な家庭支援のチャンネルであろうというふうにご示唆されましたけれども、今後、スクール・ソーシャル・ワーカーを、人力を補充するのが一番なんですけれども、それだけではなくて、なかなか人を増やしていくというのは難しい話ですから、機能を強化していくためにはどうしたらいいか。山本園長から、ご示唆いただけますか。

（山本園長）
元々の課題の家庭の教育力ということで、親の孤立化。そのための家庭支援ということもお話があり、市長のおっしゃる人間愛ということ。そのベースは、やはり愛着の問題ではないかと思います。

いろいろな家庭がございます。貧困の家庭、あとは親が病気の家庭もございます。ですから、愛着の問題というと、幼児期。小さい時のお母さんとの愛着の障害があるお子さんも、たくさんおられます。私たちは、その愛着障害は、愛着を修復できるという認識でおります。

もちろん、お母さんがお元気なのは何よりではあるんですけれども、母親の機能というのは、母親ばかりの仕事じゃないという、逆に、お母さんができなければ、代わりの母親機能を他の方が代理するということは十分できると。例えばそれが、適切な子育て支援に関わっているピッコロさんや、ウイズアイさんや、あとは、もちろん教育の現場の先生方、保育者、指導員。その人たちの関わりで、十分に愛着の修復はできるのではないかという視点でおります。しかも、それは0歳から9歳までという限定ではなく、いつでも、大きくなっても可能ではないのかと思います。そのコーディネートをする、期待されるのが、私はソーシャルワーカーではないかと。

今の教育システムの中に、いろいろそういう物事は詰まっており、それを、もう一度そういう焦点を当てたり、その補足。他のところを、家族の状態、経済状態、家族事情をよく組んでいるソーシャルワーカーの方々が介入され、その愛着障害の部分の愛着を修復していくような、修復の対話を用いながら修復していく。そこの力を発揮していただけるのはソーシャルワーカーさん方で、それに、私たちはとても期待しておりますし、清瀬市は、そのスクール・ソーシャル・ワーカーの存在については、非常に大事にしていただいているので、ソーシャルワーカーの端くれとしては、非常に心強い限りであります。

（坂田教育長）

ありがとうございます。そういうふうに評価していただくと、非常にうれしゅうございます

土屋委員。

（土屋委員）

人材の育成は本当課題で、それは私も取り組んでいかなくちゃいけないと思っているんですけれども、そのSSWの皆さんの雇用が安定したりとか、市にしっかり力が還元できるようなところは、どのようなことがやれるかということも含めて、今後の検討。今後も続けて、私も関わりながら進めていきたいというふうに思っていますし、今の山本先生のお話はそのとおりで、母親の機能を、他の地域の皆さんとも一緒になって、やっていけるような人材。古典的な人材の育成みたいなものを、清瀬市で取り組めたらいいなというふうに思います。

（坂田教育長）

私は、ソーシャルワーカーについて、山本園長、それから土屋委員、もしくは委員の方々、それから市長にも、ぜひ主張申し上げたいと言ってあります。これは何かというと、認知度です。正しい認知をつくるソーシャルワークというのは、どういう役割の人なのかということを、しっかりと市民の方々に広報していただけるような、何か働き掛けを。やはりこれは、スクール・ソーシャル・ワーク学会、また、それを育成していく社会事業大学、それを活用させていただいているわれわれ。これが、責任を持って、しっかり手を組みながらやっていかなければいけない問題だと思っています。

繰り返しますけれども、人を増やすというのはなかなか難しい中で、私は、まずそこに手を付けるべきではないかと思っていますので、ぜひこれは、よろしくお願いしたいと思います。

職務代理者、ここまでの議論を聞いて、あと本当に数分しかないんですけれども、まとめていただければと思います。

（宮川職務代理者）
まとめるなんてできないですけれども、今の幾つかの議論の中で、教育長もおっしゃっているように、どこに焦点を当てて、どこに投資していくかということを、もっと考える。それだけの力のある、清瀬市の行政職員の皆さんがいるということを、最初に申し上げたかったんですね。
今、山本先生からも、私自身も、さまざまな仕事を通して、母親機能の代理は修復できる。本当に大人になってもできるという辺り。こういう可能性を人間は持っているということ。その可能性を裏付けているのが、やっぱり人間ですから、市長もおっしゃったように、デジタル人間。それを生まないためにも、やっぱり今こそ、書くこと、読むこと、聞くこと、そして考えることを通して、心を伝えていく。
だから、そのいい例が、先ほどの武谷さんの、医師としての本質を体現した人だといわれているわけです。こういうところを取って、私たちは、市民の皆さんと、そういう大切なことを共有していくか。それが、心だろうと思うんです。
あるいは、ヨゼフ・フロジャック先生。神父でしたね。

（坂田教育長）
はい。

（宮川職務代理者）
でも、彼には、布教という目的が別にあったと思うんです。だけれども、彼の行為で、清瀬には、いろんな価値を植え付けていったと思うんです。それから、いろんな方がそうやって活躍されている。そのことを、やっぱりきちんと掘り出して、市長もおっしゃっていた愛というのか、心というのか。それを伝えることの大切さを、市民みんなでやっていくようなことをできたらどうかと思っています。
ちょっと抽象論かもしれないけれども、私は、先ほど否定的なことを言っちゃって、教育長に失礼したと思うんですけれども。

（坂田教育長）
いえいえ。

（宮川職務代理者）
でも、やっぱり、今までいろんな手は打ってきたんです。だけれども、打ち切れなかったとか。それは、打ち切れなかったのは、やっぱり予算のことだとか、そういうのがあるでしょうけれども、それを言っていたら始まらないので。だから、そういう書くこと、読むこと、聞くことを通して考えて、そして心を伝えていくということを、皆さんと考えて、これを実現していくことが、私は一番なんじゃないかと思っています。
そんなことを一言触れて、そして最後に、武谷さんと言ったのは、武谷三男というのが夫で、

どちらかというと、当時の日本政府というかな。それに対して、とても批判的な物理学者だったんです。

（渋谷市長）
　だから、ノーベル賞を外れちゃったんだよな。

（宮川職務代理者）
　そうです。だから、なぜその人と彼女が結婚したのかな。どういう、そこに愛があったのかと、知りたいなとは思っています。でも、そんなことで、この清瀬で活躍された方々のいろんな実績を通して、もう一回自分たちにも、そういうものがあるんだということを、みんなで掘り起こしていくには、やっぱりこだわっていますけれども、読書とか、俳句とか、そういうことを通してこの町の特色にしていくということを、私はぜひ実現してみることが、と思っています。
　そして、これから期待されるコミュニティースクールとか、これをもっと、そこの点を明らかにして、何のためのコミュニティースクールか。幾つかの側面があると思うんです。こういうところを明らかにして、そして市民に訴えていくことによって、何でもかんでも反対する人がいたっていいと思うんです。だけれども、芯のあるところはここなんだということ。そこを伝えていくようなことをして、協力者を増やしていくことかと思っています。少し抽象的ですみません。まとめになりません。

（坂田教育長）
　いいえ、ありがとうございました。それでは、時間がだいぶ過ぎてしまいました。私から、今日の議論をまとめさせていただいて、結論じみたことをお話し申し上げます。
　1点目は、やはり母親の孤立化を防いでいくということ。そのために学校支援本部を活用して、父親が参画できるような事業を展開していくということが、1つのアイデアとして出されました。
　また、ホームスタート・ジャパン、もしくはピッコロ、ウイズアイという、非常に重要な機能を私ども清瀬が持っておりますので、そことの連携を強化しながら、例えばペアレントトレーニングをやっていったり、というようなことも考えられるんではなかと思います。まずは取りあえず、この学校支援本部と、ホームスタート、ピッコロ、それからウイズアイの機能強化、連携強化を図っていくということが結論の1つです。
　2つ目。これは、相対的な家庭の教育力を高めていくための方策について話がありました。具体的には俳句。やはり実績のある俳句というものを、1つのチャンネルにしていこうではないかというようなアイデアです。具体的には、それぞれ各学校がやっている俳句教室に、保護者や地域の方々を招いていこうと。これは学校の協力が必要になってきますので、ぜひとも校長会等と連携を取りながら、やっていきたいと思っています。
　また、他にも、読書、食というようなアイデアも出ました。また、医療などというようなチャンネルも出てきております。これらの可能性についても検討して、何か手を打つことができれば打っていきたいと思っています。
　3点目。これは職務代理者がだいぶ強く訴えられていた、人として生きていく上での基本的なスキルである、読む、書く、話す、聞く能力をちゃんと育てて、自分の思いをちゃんと話せるような子どもたちを育てていくべきだろうと。これは、まさに学校教育がやらなければいけな

いところです。指導課が中心になって、これは今、手を打っているところでございますので、ぜひ、また市長にご報告申し上げたい。
　いずれにせよ、全て共通するのは、これは市長のお言葉を借ります。愛です。全てに共通するのは愛であると。愛をもって、これらの施策を進めていき、愛あふれる清瀬をつくることによって、家庭を救っていくことができるだろうと、こういう結論にさせていただきたいと思います。
　市長、こんな結論でよろしいでしょうか。

（渋谷市長）
　はい。

（坂田教育長）
ありがとうございました。市長。

（渋谷市長）
　あ、まって、一言話したくなっちゃう。中村天風、天風哲学。僕は人類の指導者だと思っている。もう亡くなっているけれども、護国寺の天風会館ね。

（坂田教育長）
はい。

（渋谷市長）
　それで、一番今、毎日「そうしろ、そうしろ」と自分に言っているのは、天風哲学の言葉に、「およそ宇宙の心霊は人間の感謝と歓喜という感情で、その通路が開かれると同時に、人の生命の上にほとばしり出ようと待ち構えている。だから、平素、できるだけ何事に対しても感謝と歓喜の感情をより多く持てば、宇宙霊の与えたもう最高のものを受けることができる」。感謝と歓喜、喜び。これが大事だぞというような。
　清瀬全体でも、そういう感謝していく。喜びを大事にする。そういうことをずっと続けていれば、じわじわ、じわじわ、一辺にばーんと来ないけれども、ちゃんとその力が身に付いてきて、子どもたちをそういう力が包んでくれるんじゃないかと思って。毎日、だから感謝と歓喜が大事だと。

（坂田教育長）
　市長、今のお言葉ですね。大変、私が申し上げるのは失礼に当たるかもしれない。市長の自筆で書いていただけませんか。

（渋谷市長）

自筆で？

（坂田教育長）
はい。

（渋谷市長）
それはある。

（坂田教育長）
市長の自筆ですか。

（渋谷市長）
うん。40ぐらいの時に、こちらがめちゃくちゃ、人間とは何なんだと、ぐじゃぐじゃになっていた時に天風会から手紙が来て、それで、護国寺に出掛けていって、それが縁の始まり。だから、そのときに、悟りの文集とか、いろいろあって、それを色紙に自分で書いて、今はトイレに貼ってあんの。

（坂田教育長）
トイレですか。そうですか。

（渋谷市長）
便所に入る度に、それを。幾つも貼ってあるんだけれども。

（坂田教育長）
今の感謝の話もありますか。

（渋谷市長）
うん。

（坂田教育長）
ぜひじゃあ。

（渋谷市長）

そう。じゃあそれ、コピーして。

（坂田教育長）
われわれの中で、共有していく思いというのが絶対に必要だと思うんです。やはり私たちは、清瀬市の教育委員会ですから、これは、ある意味では、清瀬市のトップである市長の思いと願いというものを、教育のチャンネルから具体化していくのは、われわれの責任なんです。

（渋谷市長）
そうだ。これからだ。

（坂田教育長）
ですから、市長の思いと願いを、やはり具体的に表していただいて、われわれはそれを形にしていく。それが役割だと思っていますから、ぜひ頂ければと。

（渋谷市長）
そうだ。国を失うとされた結核を抑え込んだのは清瀬だ。これからデジタル人間なんて、平気で人をぐさっと刺して、感受性がなくなってくる。今度はそこに向かって、清瀬がしっかりと。

（坂田教育長）
そのとおりですね。

（渋谷市長）
うん。そういう役割を担っているから、本当にそれぞれの現場、現場が、わずかな歩みでも、とにかく前に進む。これが、必ずじわじわと本物の姿をつくり出していくと思う。

（坂田教育長）
本物の教育、本物の町を目指す。そのことによって、家庭もたくさん救われていく。家庭の力も伸びていく。今日の結論は、これかもしれません。

（渋谷市長）
うん。

（坂田教育長）
長い間、どうもありがとうございました。山本園長に、委員の皆さま方、拍手をお願いしま

す。ありがとうございました。

（一同）
　ありがとうございました。（拍手）

（坂田教育長）
　では、これで解散いたします。